

緊急生産調整推進排水対策特別事業南部南部川地区水路改良工事に伴う

高田土居城跡発掘調査



2003年3月
財団法人 和歌山県文化財センター

例　　言

1. 本書は和歌山県日高郡南部町気佐藤に所在する高田土居城跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は南部・南部川地区古川支線改良工事に伴うもので、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 調査の内容は高田土居城の外堀の確認である。
4. 調査組織は下記のとおりである。

事務局	調査担当部局
専務理事（事務局長兼務） 岩橋 駿	埋蔵文化財課長 渋谷 高秀
事務局次長 松田 正昭 篠原 隆	主任 佐伯 和也
課長 西本 悅子	専門調査員 藤村 瑞穂
副主査 松尾 克人	

5. 本書の執筆・編集は佐伯が担当した。
6. 本文中の土壤の微化石等の科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
7. 調査および整理作業で作成した実測図・写真・遺物台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

凡　　例

1. 本文中の遺構実測図および地区割の基準線は国土座標第VI系に基づいている。北方位は国土座標北を示す。また、土層図等の基準高は東京湾標準潮位（T. P. +）の数値である。
2. 実測図の土層の色調には日本色研事業株式会社『新版標準土色帖』を使用した。

本　文　目　次

調査の経緯	1
位置と環境	1
調査成果	1
高田土居城の自然化学分析	9

挿　図　目　次

図1 高田土居城跡と周辺の遺跡	2
図2 調査位置図	3
図3 調査範囲図	4
図4 調査地点別土層図および出土遺物	6
図5 遺構平面図	10

図　版　目　次

P L 1	第I工区堀検出状況（南西から）
P L 2	第II工区堀検出状況（北東から）
P L 3	第II工区堀検出状況（南西から）
P L 4	第III工区堀検出状況（北東から）
P L 5	第III工区堀検出状況（南西から）

第I工区土層堆積状況（南西から） A - B間
第II工区土層堆積状況（北東から） K - L間
第II工区土層堆積状況（南西から） I - J間
第III工区土層堆積状況（南西から） E - F間
第III工区土層堆積状況（南西から） G - H間

I. 調査の経緯

調査地周辺は埋蔵文化財の包蔵地が多く、近年南部インターチェンジ建設や、これに伴うアクセス道関連の発掘調査が頻繁に行われている。これによって縄文時代から中世までの多種多様な遺構が検出され、また多量の遺物も出土している。

本調査地は平成9年度から発掘調査を行ってきた徳蔵地区遺跡の中の高田土居城の範疇にある。高田土居城跡は平成11年度に北側の外堀を、平成13年度に東と西の外堀の一部が確認されている。本調査はこの外堀の推定延長ラインにあたりこの外堀確認を目的とする。

さて、今回の発掘調査はもともと南部・南部川地区は地下水位が高く、水田が湿潤ぎみなため、和歌山県日高振興局農地課が現在の古川支線を改良し、水田・畑地の良好化を促進する目的に端を発する。そしてこの事業を推進するに当たり、日高振興局と和歌山県教育委員会との間で支線改良予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについての協議がもたれた。結果、上述した高田土居城跡の調査成果を基に、外堀の推定部分の屈曲地点に調査区を設け発掘調査を開始した。

II. 位置と環境

高田土居城跡は南部川の旧河川が形成した自然堤防上およびその後背湿地に位置する。遺跡の立地する標高は約4.0mである。

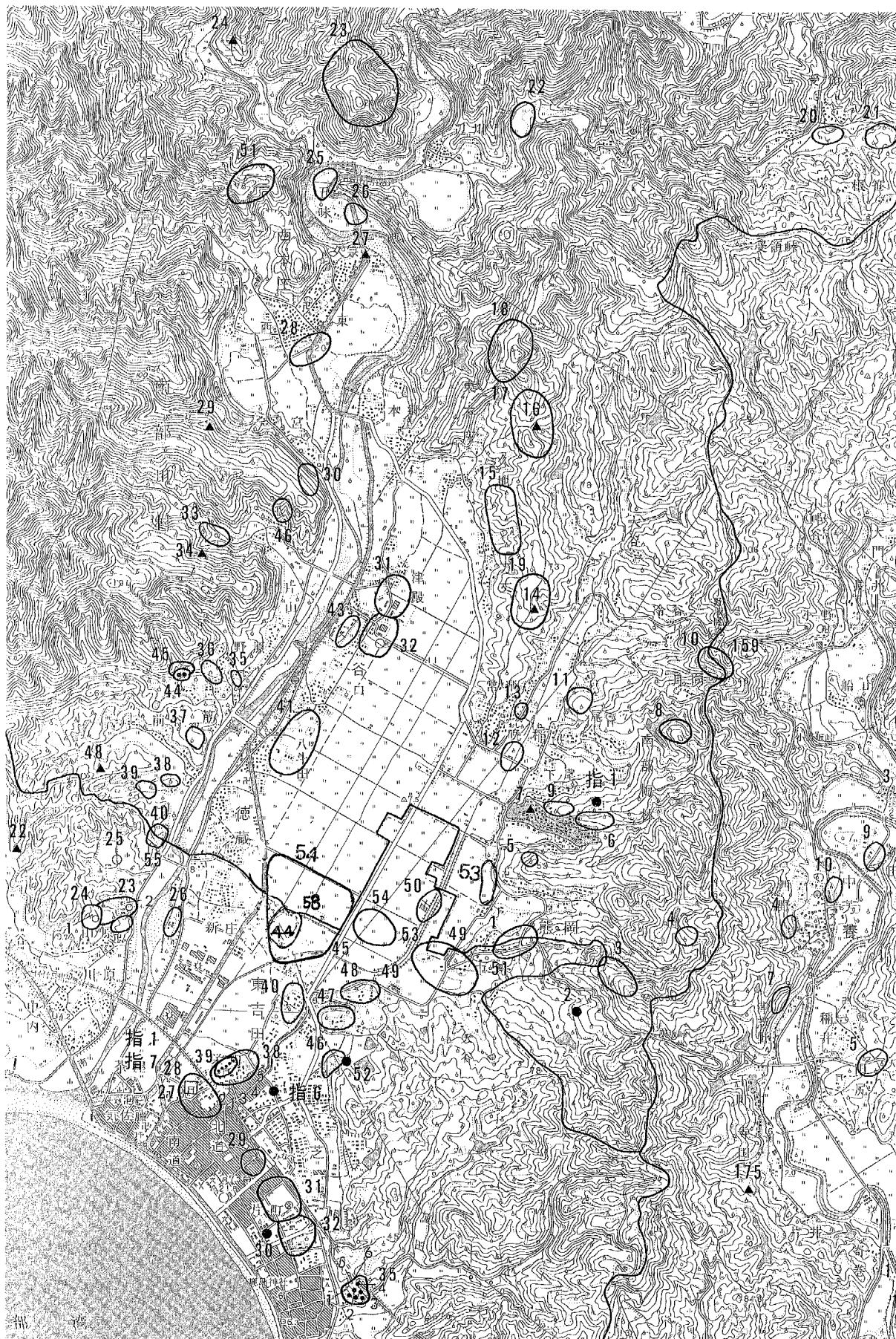
中世初めには高野山領南部荘として知られる「八丁田圃」と呼ばれるこの辺り一体の水田地帯は、全国的に見ても条里型地割りが良好に残っており、荘園研究の対象地とされている。

周辺の遺跡には縄文時代から中世までの複合遺跡である徳蔵地区遺跡、砂丘上に古墳時代の集落跡が検出された大塚遺跡がある。また、丘陵上に位置し縄文時代の土器が散布していることで知られる岡の段遺跡、上城遺跡、北東では奈良時代から近世の土器の散布地として東吉田I・II遺跡がある。熊野古道沿いの熊岡遺跡では鎌倉時代の経塚が出土している。高田土居城から北方に約4kmの南部川村西本庄と東本庄の間に位置する標高206mの山稜南端には、高田土居城の城主と言われる野辺氏の平須賀城がある。この山城は平成6・7年度の二年間に渡って発掘調査され大小の曲輪や堀切が確認されている。

III. 調査成果

調査地の現況は水田である。調査区は古川支線西堤に沿って3工区を設定した。北側の第I工区は約14m²、南側の第II工区は約84.4m²である。工区の設定は古川支線のそばで湧水等の悪条件を考慮にいれ、アースオーガ併用による鋼矢板圧入方式で行なった。第III工区については、第I工区と第II工区の調査補足確認という意味で設けた調査区であるため、掘削の勾配を緩やかにとり矢板圧入は行わなかった。この工区の調査面積は103.8m²で、全体の調査面積は202.2m²となる。第I工区と第II工区に関しては鋼矢板圧入工法の関係上、十層図作成時に表土除去済みである。

また調査地の地区割りは徳蔵地区遺跡の調査に準拠し、基点は(X=-246.000,Y=-61.500)であ



23: 平須賀城跡 53: 熊岡遺跡 40: 大塚遺跡
 54: 東吉田II遺跡 58: 徳藏地区遺跡 44: 高田土居城跡
 47: 岡の段遺跡 48: 上城遺跡 53: 東吉田I遺跡

図 1 高田土居城跡と周辺の遺跡

る。以下調査区ごとに順を追って調査成果を記す。

(第Ⅰ工区の調査)

県道上富田線と古川支線の交差する南西側に調査区を設定した。調査は現地盤から近代・近世の堆積土（埋土a～d）を約1.2m機械掘削により除去した。

この機械掘削時点で調査地の古川支線寄りで深さ約1.0m、幅は調査区外に延びるため不明であるが0.9m以上を測る溝状の遺構を検出した。埋土はいかにも人為的に埋められたかのようにN 6 / 0（灰）・N 8 / 0（灰白）・10YR 7 / 8（黄橙）のシルト質の土が5～20cmの塊でブロック状に入り乱れていた。これは旧の古川支線と考えられなくも無い。ここからは第4図の遺物1が出土している。体部は二重構造となり外面の両側には獸面を貼りつけ孔を穿っている。現代の七輪に相当するものであろうか。またd層の最下層からは近世の備前焼すり鉢片（遺物2）が出土している。

次に上層の近世土を除去後、この下で中世（外堀埋土）と考えられる遺構面を検出した。しかし、この埋土は近世に大きく搅乱をうけているため、堀の肩は立ち上がらずに底の部分の埋土だけが残存していると考えられる状態のものを検出した。埋土の厚さは約50cmを測り、3

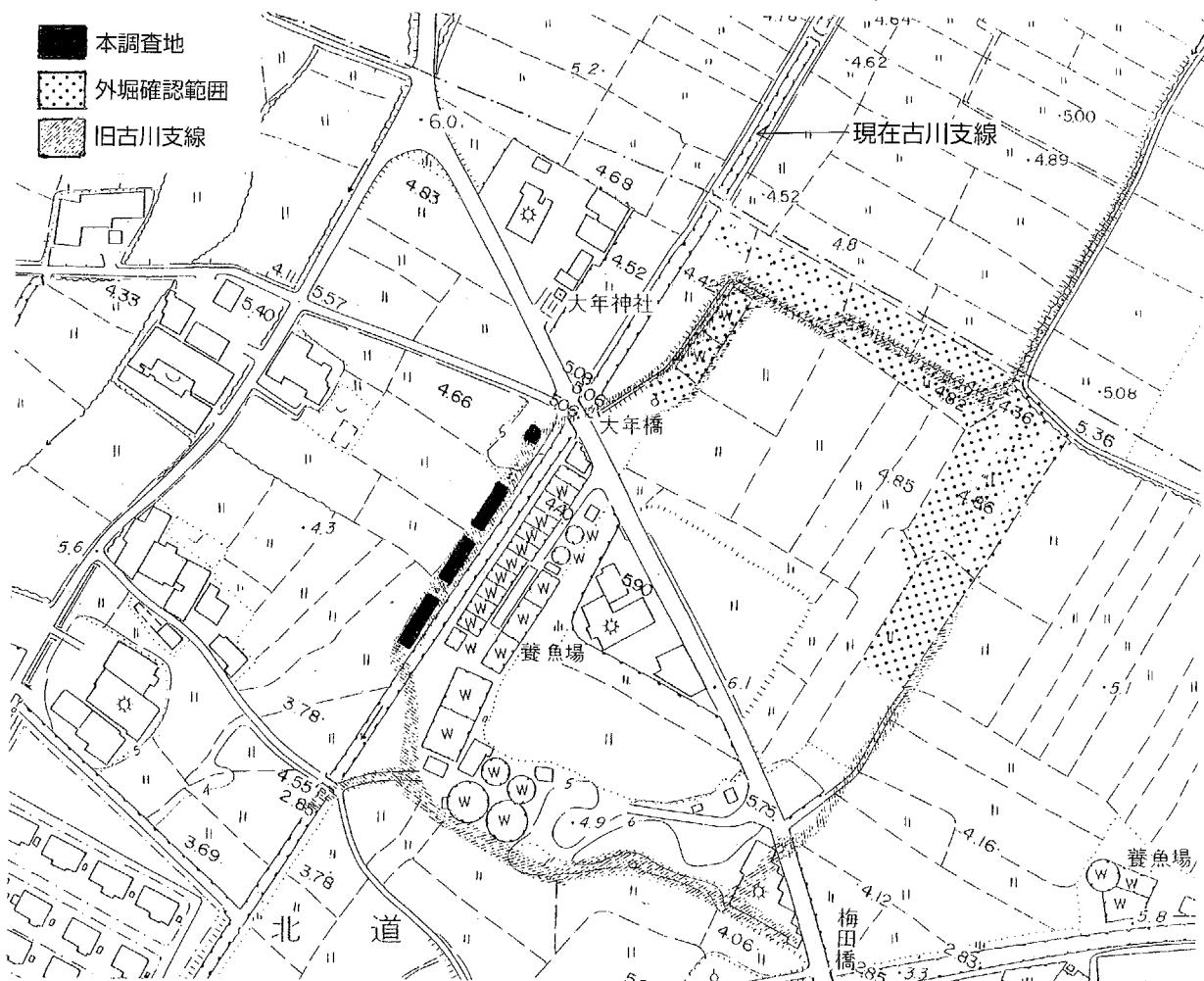


図2 調査位置図

層に分層でき全体的に土質は粘土質であった。ここからの出土遺物は皆無であった。またこの堀のベースとなる土（埋土e～g）は基本的には微砂と木屑が混ざるもので自然流路と考えられる。ここからの出土遺物も皆無であった。

（第Ⅱ工区の調査）

鋼矢板圧入後、調査区の両端でセクションベルトを残した。近世の水田層と思われる層（a）を機械で除去し、これから下層については人力で下げた。近世水田層の次に中世の水田層・包含層（b）を検出した。この層の下層からは土師器片・瓦器片が数点出土した。自然流路の埋土（c～e）をベースに外堀と考えられる西肩の落ちを検出した。西肩部での残存の深さは約0.7m～0.9mを測る。埋土は3層に分層でき、全て青灰色系の粘土質であった。

堀の埋土と考えた層からは中世の遺物はまったく出土しなかった。北側セクションベルトの近くの下層の（ハ）からは弥生時代中期の高杯の筒状の柱状部（遺物9）が出土した。これは縦方向の荒いミガキを施し、脚部に4孔を穿つ。また南側セクションベルト付近の同層からも弥生時代中期の広口壺（遺物10）が出土した。口縁端部をつまみあげ、口縁部外面には3条の凹線文の痕跡が窺えられる。自然流路の上層は青灰色のシルトで下層は粗砂、細砂、木屑混じりのものであった。この埋

土の状況は第Ⅰ工区と同様で、調査地全般にわたり自然流路が広がっていることが予測できる。またここからの出土遺物は皆無であった。ただし、自然流路の埋土を掘削したのは北・南のセクションベルトの際のみである。

（第Ⅲ工区の調査）

この工区は前述したように、第Ⅰ工区と第Ⅱ工区の調査において外堀の埋土と考えられる堆積上を検出したので、はたしてこの間にもその続きとしての外堀埋土が存在するのかどうかを確認するための工区であ

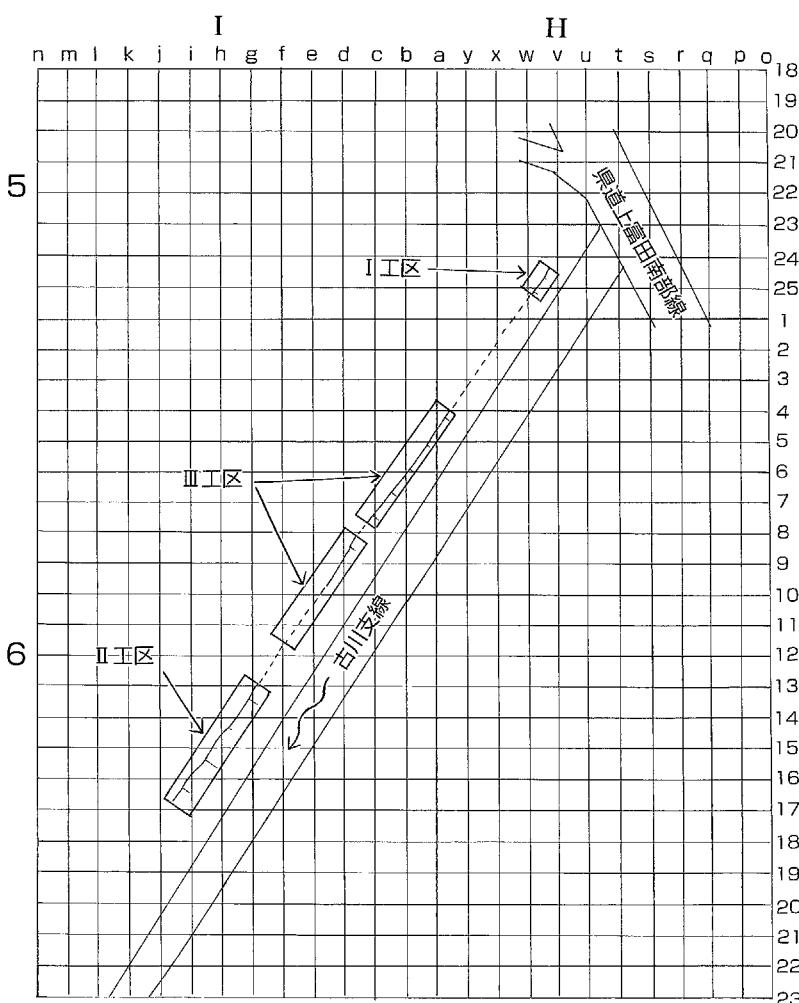


図3 調査範囲図

る。堆積土の状況は第Ⅰ工区と同様で、現地盤から1～1.2m下までは近世の堆積土（a～d）で埋まっていた。この近世堆積層のd層からは最も多くの遺物が出土した。備前焼すり鉢（遺物5）は中世（16世紀）のものである。体部内面のかなり上から粗い5本一単位の摺目を施している。また肥前系染付磁器（遺物4・6・7）も多く出土した。4は小型の瓶子で、織細な重の網目文を描いている。畳付きは無釉である。6・7はくらわんか茶碗で6は草花文、7は丸文を描き見込みには五弁花の簡略化したものが描かれている。

この近世堆積土除去後第Ⅰ工区と同様に、自然流路の堆積土をベースとして厚さ15～20cmの外堀の底の一部と考えられるものを検出した。ここからの出土遺物はセクションベルト（G-H）で出土した土師器の小皿（遺物8）ただ一点のみであった。器面は著しく摩滅しているが、底の形状から糸切調整を施しているものである。

自然流路の埋土（e層）からは古墳時代初頭と考えられる高杯の脚台部が出土した。杯部内面を横方向にやや太目のミガキを分割に、また柱状部は縦方向にミガキを施している。

【まとめ】

以上のように第Ⅰ工区～第Ⅲ工区についての調査内容を記してきたが、調査地の地形的な観点からいうと、第Ⅲ工区とした調査地の水田は幅約4m、長さ約38mにわたり、古川支線に取り付くようにある。また、この水田は周辺の水田より一段低くなり、その比高差は20～30cmを測る。このような不自然な水田の地割りは考えがたく、外堀跡の名残りと考えるのが妥当と思われる。また堆積状況からみて、第Ⅰ工区と第Ⅲ工区は近世の堆積土で搅乱され、外堀埋土と考えられるものの厚みが15～20cm、底の標高が約2.6m～2.8mという同様の状況から、第Ⅱ工区の堀とした堆積土とは大幅に様相が異なる。したがって、第Ⅱ工区の外堀埋土と考えられるものは、自然流路のある時期の堆積層と考えるのが妥当と思われる。また、出土遺物においても弥生時代のもので、堀の時期に相当する中世遺物が皆無であったことからも自然流路の可能性が高い。それに第Ⅱ工区の設定位置は外堀推定ラインの屈曲部から外側にはずれている可能性もありうる。

また、第Ⅱ工区で検出したものも外堀の埋土と考えた場合、調査区の南域は現在でも低湿地であり、標高にして本調査区より約1.5mも低いところから当時は沼地化し、このまま屈曲せずに南方に延び、自然消滅していた可能性も考えられる。

土壤に含まれる花粉分析結果からも、堀の埋土として第Ⅱ工区で採集したものと、第Ⅲ工区で採集したものとでは森林植生において差異がみられることが指摘された。このことからも第Ⅱ工区が外堀でない可能性が多分に考えられる。

以上から、本調査の第Ⅰ、第Ⅲ工区で検出したものを、外堀と断定するにはまだ資料不足ではあり、今後の周辺の調査に期待がもたれる。

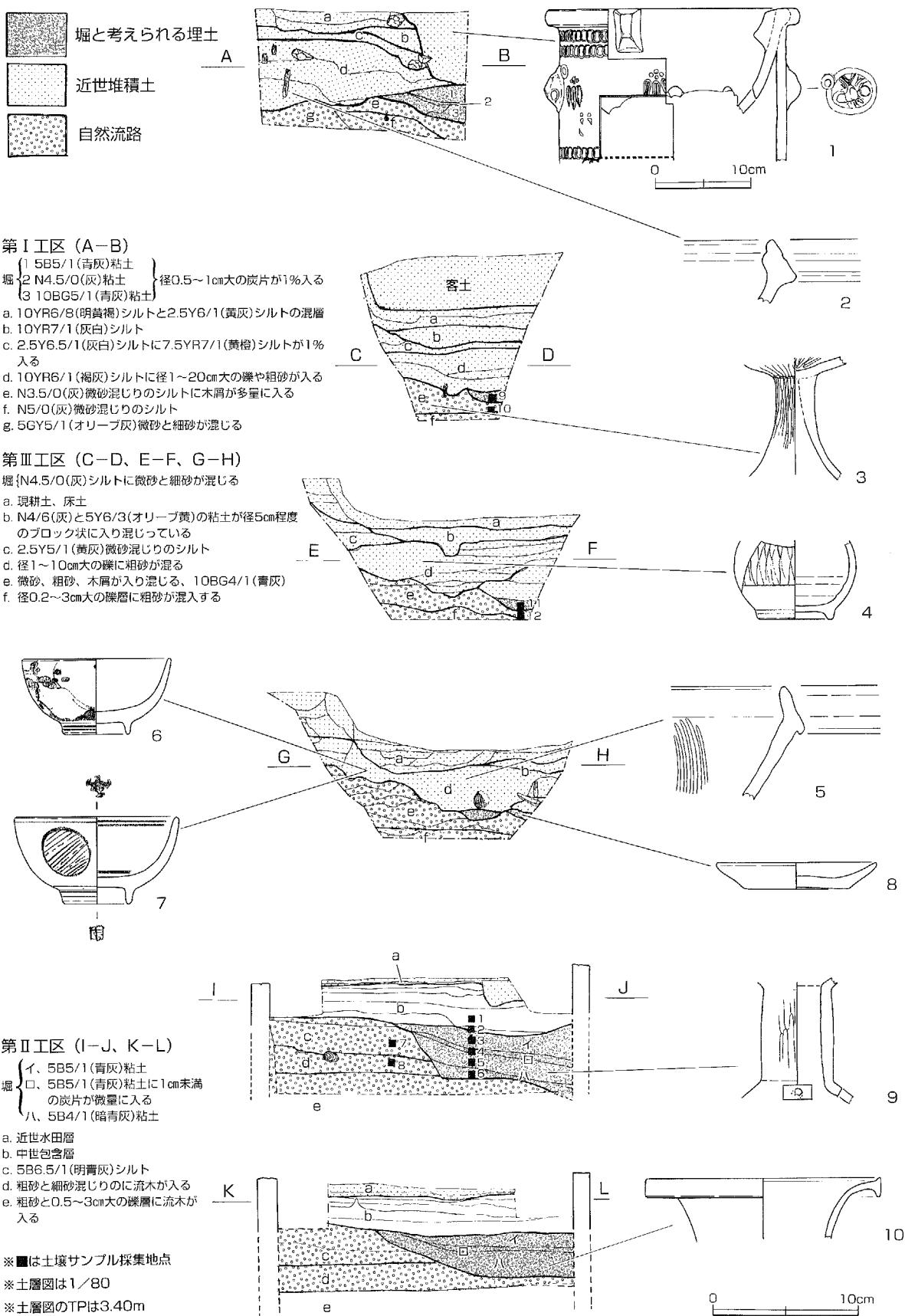


図4 調査地点別土層図および出土遺物

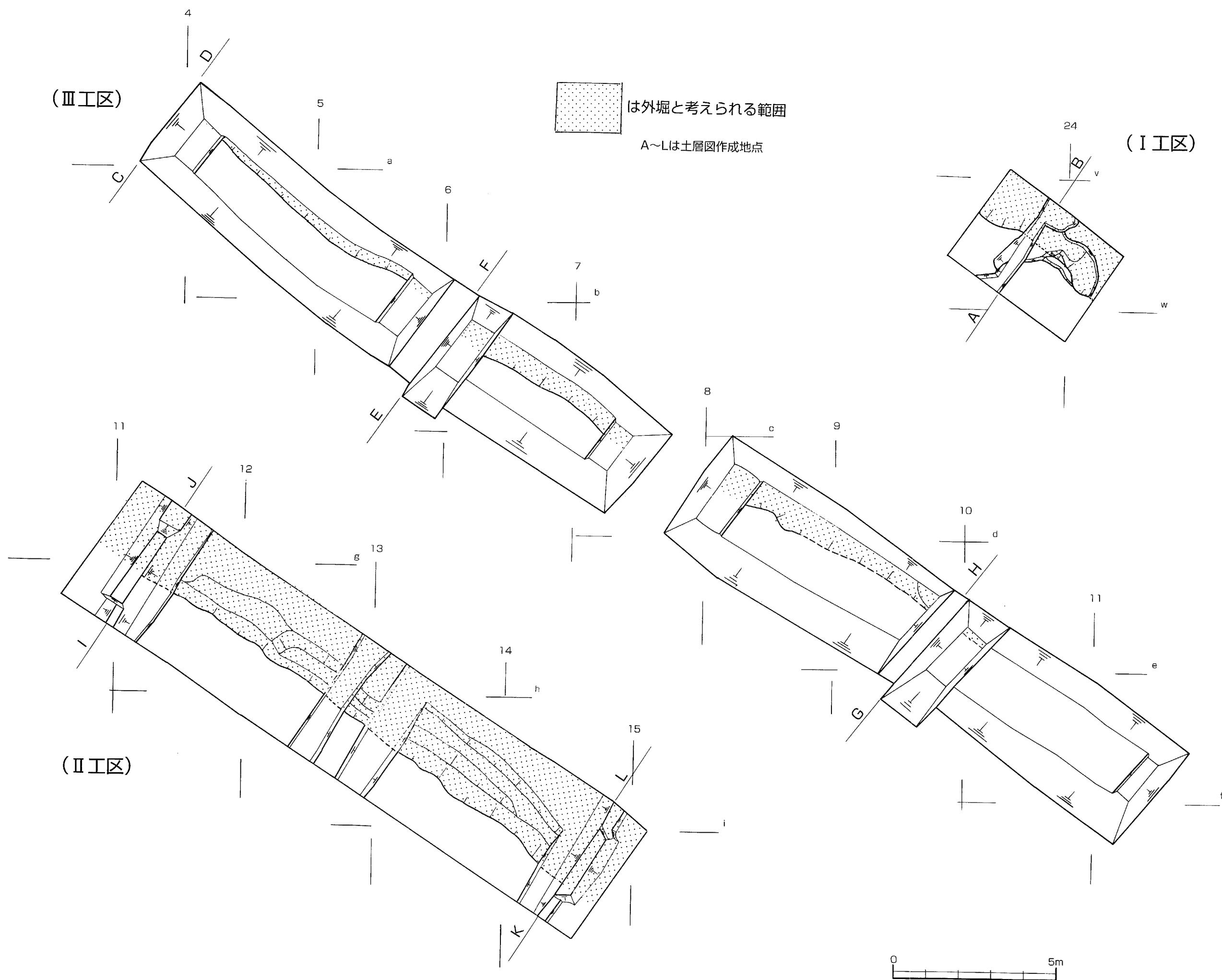


図5 遺構平面図

高田土居城跡の自然科学分析

新山雅広・藤根久（パレオ・ラボ）

1. はじめに

高田土居城跡は、和歌山県日高郡南部町気佐藤に所在する。本遺跡では、これまでの発掘調査により、北外郭部を囲む外堀と溝で区画された屋敷地から堀建柱建物跡・井戸・桶埋設土坑などが検出された。ここでは、外堀と推定されている地点のトレンチ調査で採取された堆積物を試料とし、花粉化石群集（新山）および珪藻化石群集（藤根）の検討を行った。試料としたのは、縄文時代晩期～弥生時代前期の自然流路埋土（試料7、8、10、12）、室町時代終わりの堀埋土（試料3～6、9、11）、中世以降（堀より後）の堆積物（試料1、2）である。

2. 古植生および堆積環境の推定

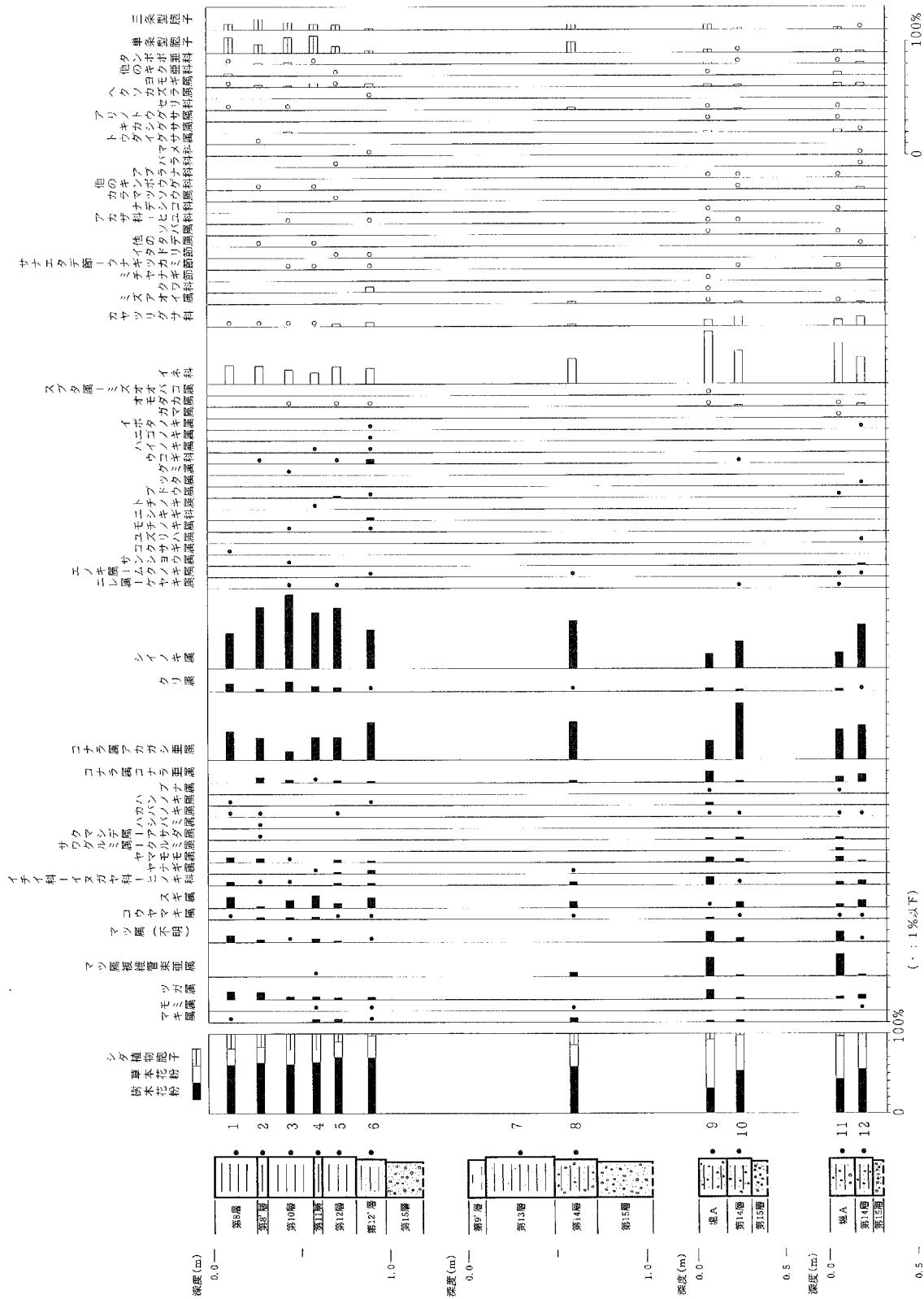
花粉化石群集を検討した結果、各時期の古植生等は以下のように推定された。

縄文時代晩期～弥生時代前期（自然流路埋土）には、アカガシ亜属とシイノキ属を主体にヤマモモ属、ユズリハ属などをまじえた照葉樹林が発達していた。自然流路については、水生植物（抽水植物）のオモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属が生育しており、さほど水深がなく、あまり強い流れは伴っていなかったであろう。

室町時代終わり（堀埋土）には、試料3～6では、シイノキ属とアカガシ亜属を主体にした照葉樹林が発達しており、試料9、11では、照葉樹林以外にも針葉樹のマツ属複維管束亜属が優占していたと予想された。このような予想される森林植生の差異から、試料3～6と試料9・11とでは、堆積物の時期が異なり、試料3～6と試料9・11のいずれかは、堀埋土ではない可能性が考えられた。堆積環境については、いずれの試料も水位の低い湿地ないし水溜りの存在が予想され、堀は、さほど水深がなく、強い流れは伴っていなかったと考えられた。また、試料9、11では、付近に水田が存在していた可能性やソバ栽培が行われていたことが予想された。

中世以降（堀より後）には、シイノキ属、アカガシ亜属を主体にヤマモモ属などをまじえた照葉樹林が発達していたと予想された。試料1、2は、近世か中世かの時期が判然としていないが、下位の試料3～6の組成と酷似しており、試料3～6が堀埋土（室町時代終わり）であるとすれば、試料1、2は中世の可能性が高いと考えられた。

なお、珪藻化石群集を検討した結果、自然流路内および堀内の各堆積物中の珪藻化石は、全体的に少なかった。少ない理由は、花粉化石が検出されていることから、堆積後に珪藻殻が溶出したものと考えられる。なお、堀内堆積物の試料6からは、比較的検出されたが、沼沢湿地付着生指標種群と陸域指標種群が数個体検出されたのみで、多くは水域に成育する広布種であった。このことから、堀の初期においては、沼沢地のような環境であったことが予想される。

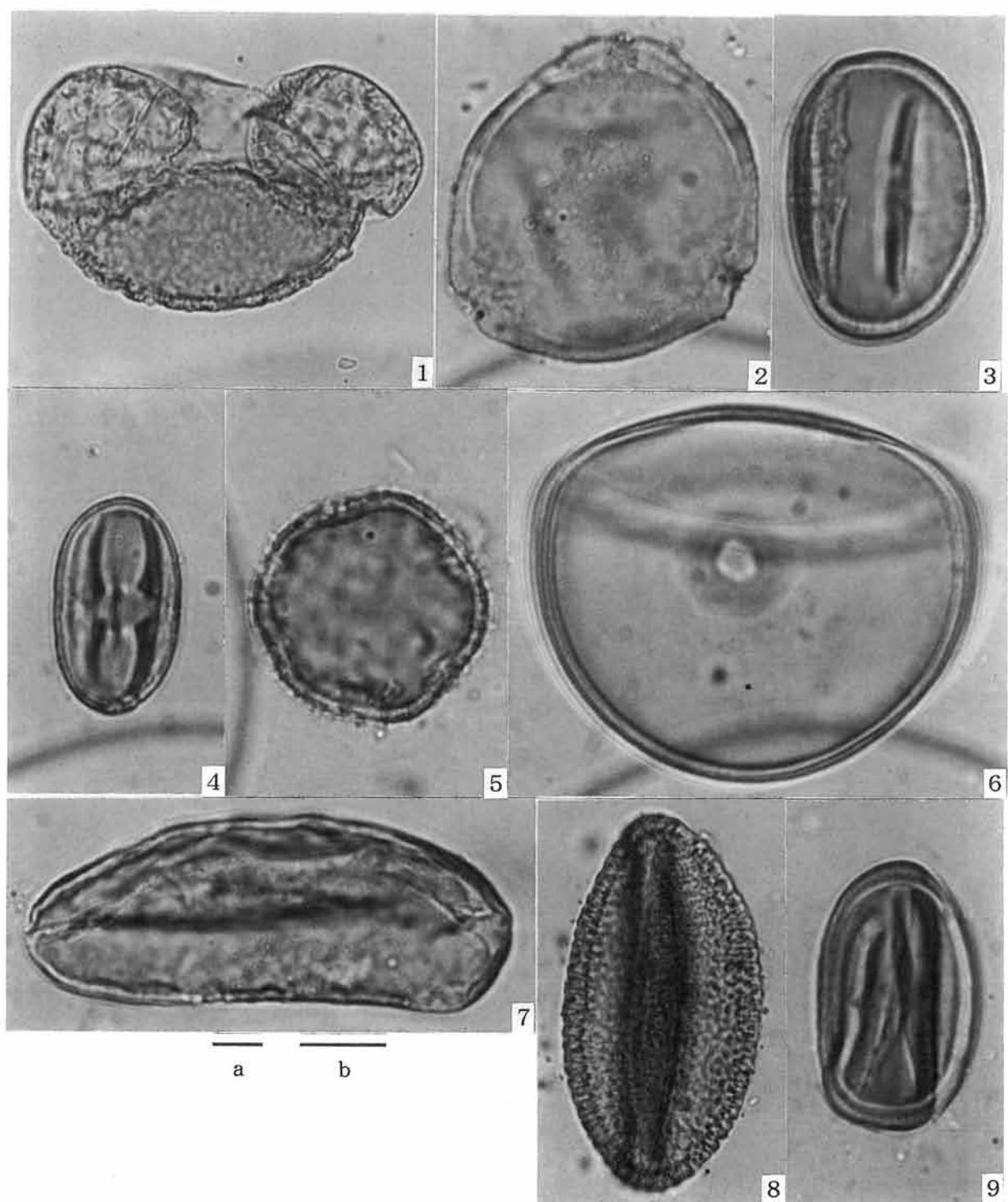


花粉化石分布図

中世以降堆積物(試料1、2)、堀埋土(試料3~6、9、11)、自然流路埋土(試料7、8、10、12)

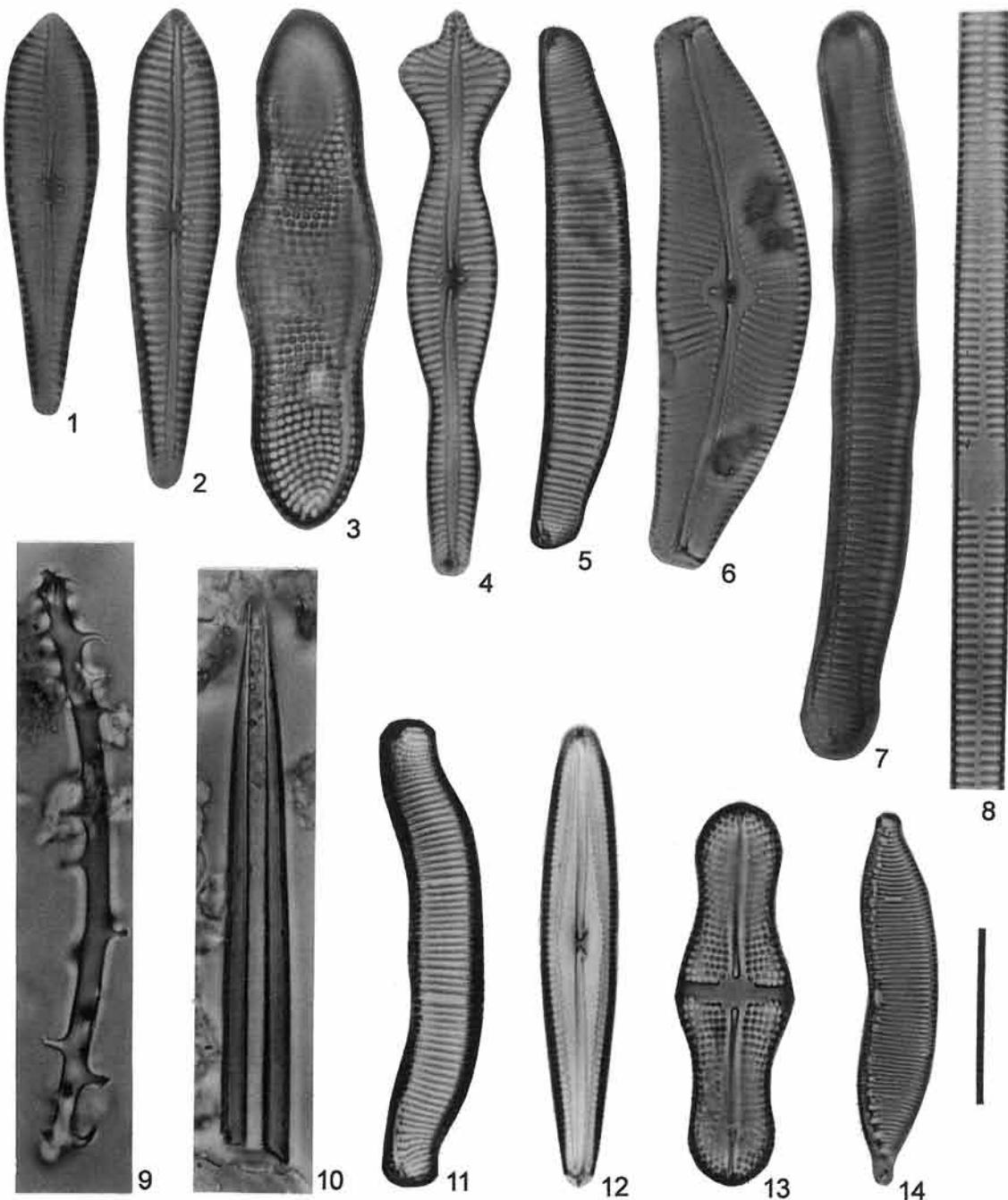
(樹木花粉は樹木花粉總數, 草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基數として百分率で算出した)

凡例



産出した花粉化石 (scale bar : 10 μm a : 1, 8 b : 2~7, 9)

1. マツ属複維管束亞属、試料 9、PAL. MN 1850
2. ヤマモモ属、試料 11、PAL. MN 1858
3. コナラ属アカガシ亞属、試料 10、PAL. MN 1855
4. シイノキ属、試料 5、PAL. MN 1854
5. オモダカ属、試料 12、PAL. MN 1859
6. イネ科、試料 9、PAL. MN 1851
7. ミズアオイ属、試料 10、PAL. MN 1856
8. ソバ属、試料 9、PAL. MN 1852
9. キカシグサ属、試料 11、PAL. MN 1857

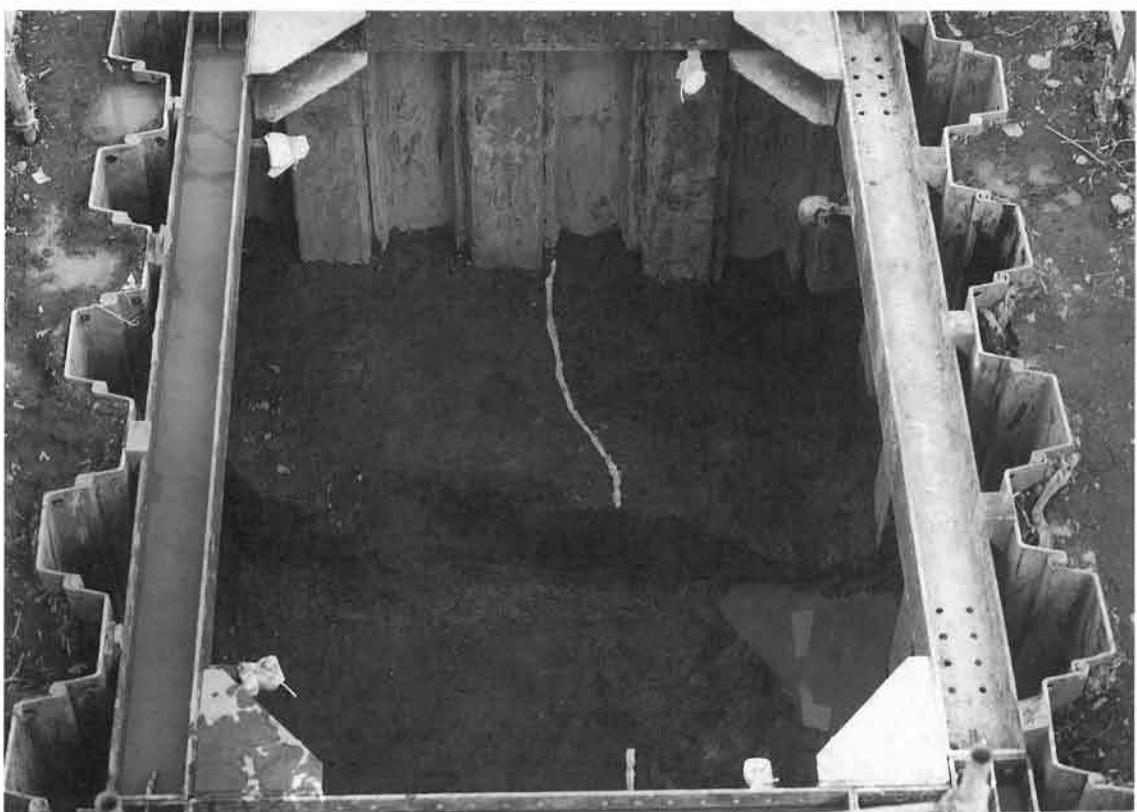


堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真 (スケール: 20 μm)

- | | |
|---|--------------------------------|
| 1. Gomphonema augur No. 6 | 2. Gomphonema augur No. 6 |
| 3. Achnanthes brevipes No. 4 | 4. Gomphonema acuminatum No. 6 |
| 5. Eunotia pirla No. 6 | 6. Cymbella tumida No. 6 |
| 7. Eunotia pectinalis var. undulata No. 6 | 8. Synedra ulna No. 6 |
| 9. 骨針化石 No. 10 | 10. 骨針化石 No. 9 |
| 11. Eunotia rostellata No. 5 | 12. Gomphonema grovei No. 5 |
| 13. Achnanthes inflata No. 5 | 14. Hantzschia amphioxys No. 4 |



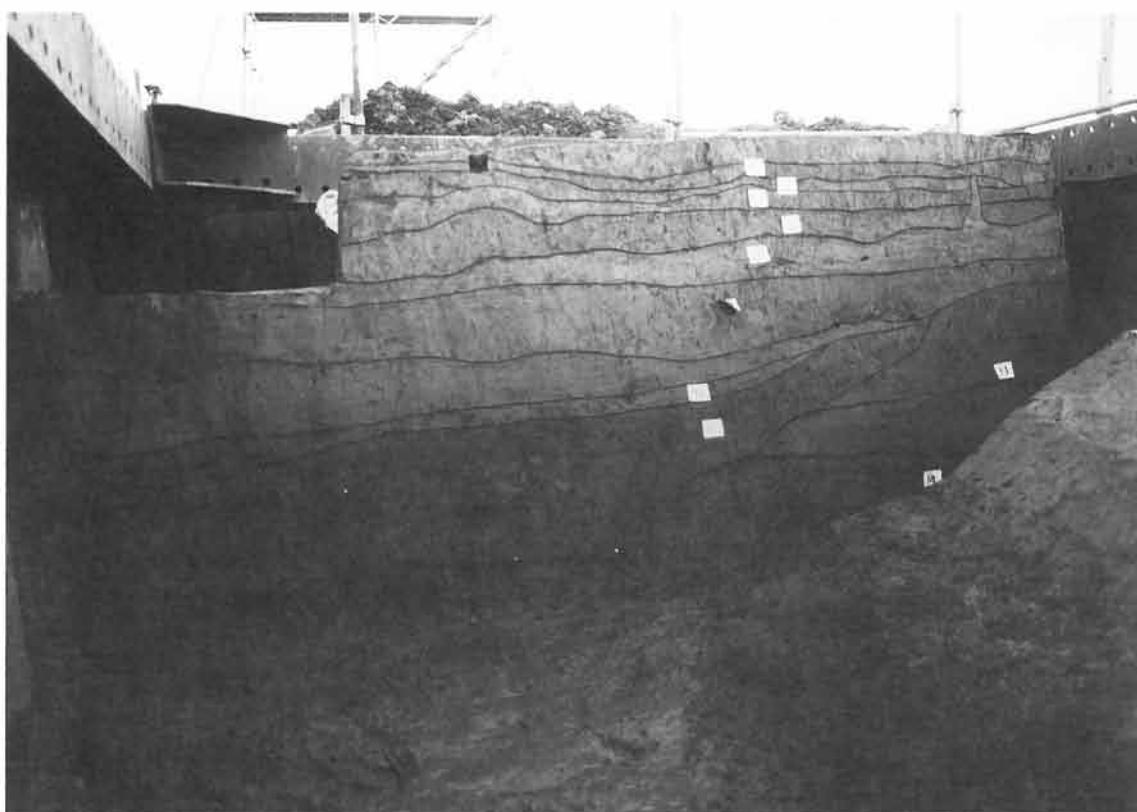
第Ⅰ工区セクションベルト土層堆積状況（南西から）（A-B間）



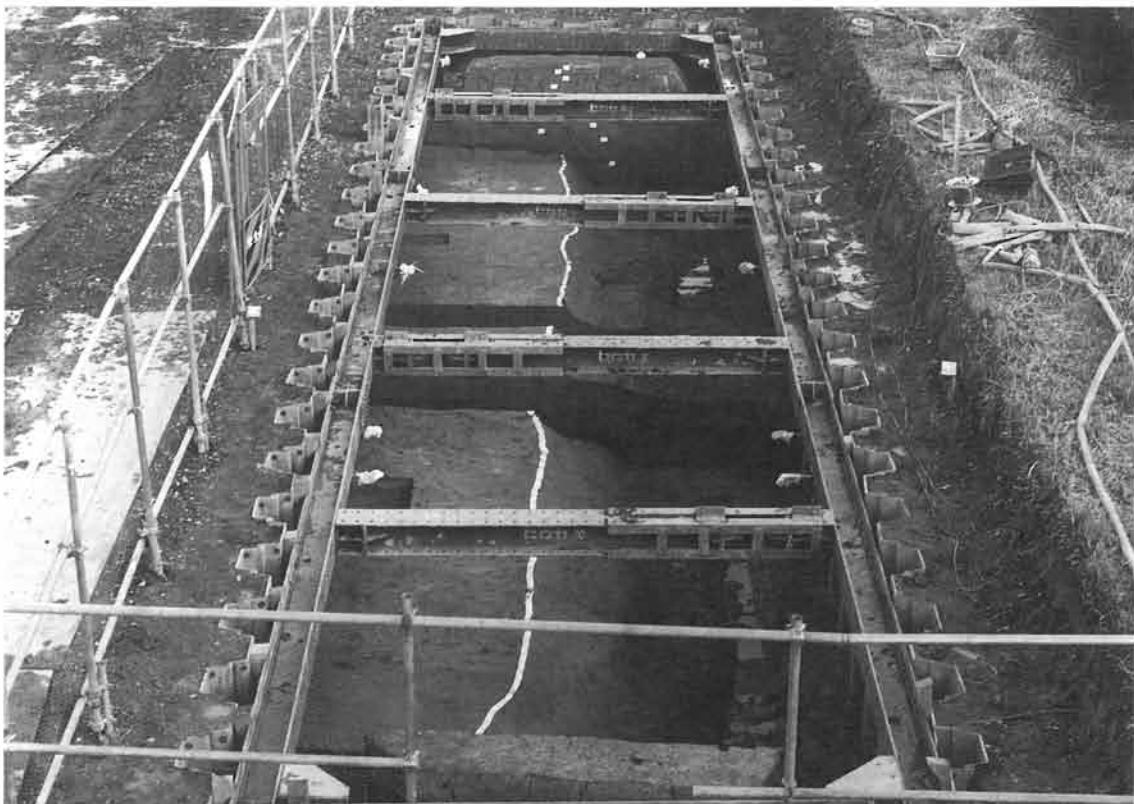
第Ⅰ工区堀検出状況（南西から）



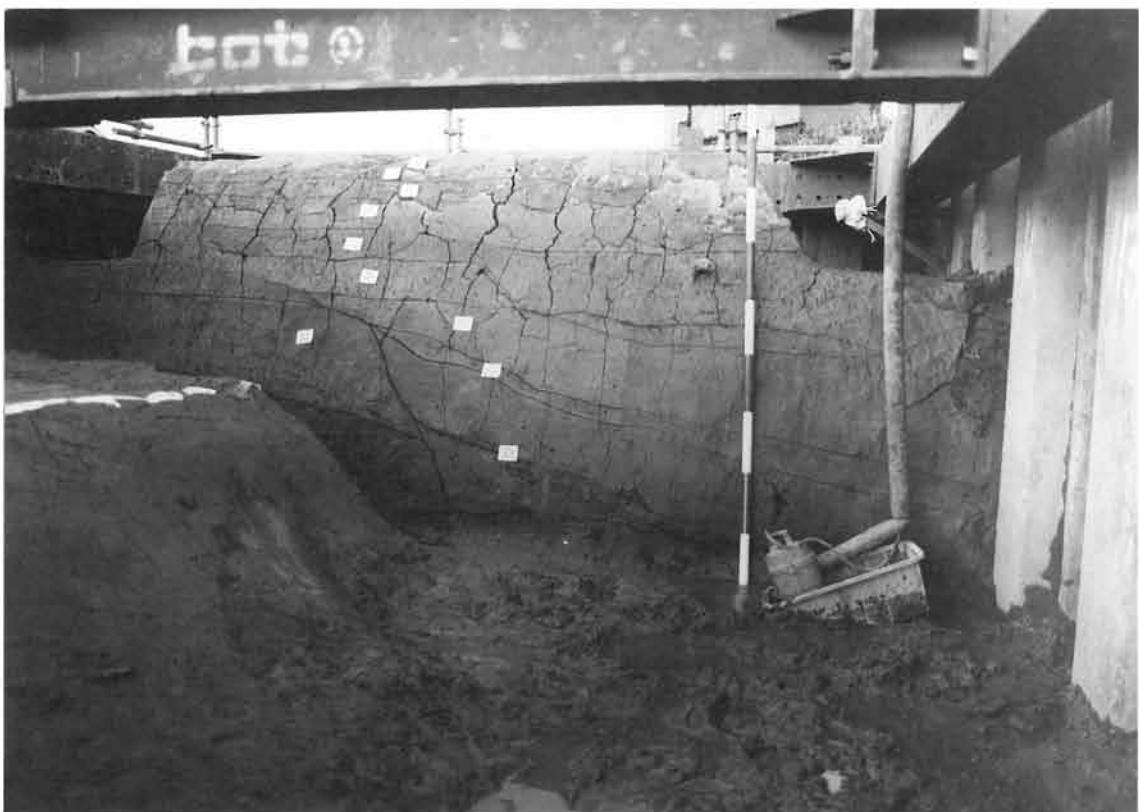
第Ⅱ工区堀検出状況（北東から）



第Ⅱ工区セクションベルト土層堆積状況（北東から）（K-L間）



第Ⅱ工区堀検出状況（南西から）



第Ⅱ工区セクションベルト土層堆積状況（南西から）（I - J間）



第Ⅲ工区堀検出状況（北東から）



第Ⅲ工区セクションベルト土層堆積状況（南西から）（E-F間）



第Ⅲ工区堀検出状況（南西から）



第Ⅲ工区セクションベルト土層堆積状況（南西から）（G-H間）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	たかだといじょうあとはくつちょうさ					
書名	高田土居城跡発掘調査					
副書名	緊急生産調整推進排水対策特別事業南部南部川地区水路改良工事に伴う					
編著者名	佐伯 和也					
編集機関	財団法人 和歌山県文化財センター					
所在地	〒640-8268 和歌山県和歌山市広道20番地 TEL 073-433-3843					
発行年月日	西暦2003年3月31日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			
たかだといじょうあと 高田土居城跡	ひだかぐん 日高郡	38950	44	33° 46' 29"	平成14年 10月30日 ～ 平成14年 12月27日	古川支線の 改良工事
	みなべちょう 南部町			東経		
	きさとう 気佐藤			135° 19' 35"		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
高田土居城跡	城館跡	室町時代 ～ 江戸時代	堀跡	近世陶磁器 ・ 弥生土器	高田土居城の検出した西側外堀は現代の古川支線改修時に大幅に搅乱をうけたものと考えられる。	

高田土居城跡発掘調査

——緊急生産調整推進排水対策特別事業
南部南部川地区水路改良工事に伴う——

2003年3月

編集
発行 財団法人 和歌山県文化財センター

印刷
製本 中央印刷株式会社